慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文名に対するローマ文人の憧憬
Sub Title	The aspiration to literary fame of the Roman men of letters
Author	樋口, 勝彦(Higuchi, Katsuhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1964
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.18, (1964. 9) ,p.96- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00180001-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文名に対するローマ文人の憧憬

樋口勝彦

古代ローマの文人には、文名に対する憧憬が非常に強かったようである。筆(スチルス)をとる者の一途に憧れていたのは、文名を馳せることであった。と言い切っても強ち過言と謗り去ることは出来ないであろう。ペルスィウスは『学問をしても、胸中に自ら醞醸し、押えても押え切れぬ思想、感情の発露がないならば何の甲斐もなかろう』という意味のことを、此の詩人独特の晦渋な表現で、次のように言っている。

何の為に学んだことになろうか。若しこの酵母が、内に一度生れた野生の無花果が、肝臓〔――即ち心〕を破って外に出て来ることがないとしたならば、

〔一、二四―二五〕

と。自ら発生する酵母の如く、或いは岩の裂け目に種子を落しても、生長してその岩を割ると古人の信じていた生活力の強い野生の無花果にも比す可き、殆んど本能に近い表現慾こそ、ものを書く者の、真の動機でなくてはならないかも知れない。が、ローマ人が実に淡白に、公然と表明してはばからないのは、文名への憧憬であった。諷刺詩人ユウェーナリスの云う『名声の甘味』dulcedo famae であった。オウィディウスの

通常、才に刺戟を與えるところの名声

に外ならなかった。これこそ、史家タキツスの言を藉りれば、

あらゆる彼等の辛苦に対する、唯一の報いである、と彼等は認めている、

（「対話」）一〇）

キケローも、詩人が粉骨砕身するのは、死後の名に生きんが為であると云い。エンニウスの言葉

我は人々の口に生きて飛び歩く

を引用している。（ツスクラーナエ、一、一五）これは相当人口に膾炙されていた言葉らしく、よく引用されている。例えば、ウェルギリウスの『農耕詩』三巻、第八行にも見える。なお又キケローは、デーモステネースが路傍はしたない水汲み女に『これが、あの有名なデーモステネースだ』（ツスクラーナエ、五、三六）と仲間に私語くのを耳にして喜んだという挿話を語り、そうかと云って、デーモステネース必ずしも軽薄だとは云えない、と弁じている。名声は不滅なりとの固い信念を、キケローは屢々吐露している。そして、名を後世に残し度いという情を弁解する為に、こんなことを言っている。

哲学者さえも、名声というものは蔑視す可きものである、と説きたてているその著書に、自分の名を記銘しているではないか。人々の口端に乗ることとか、名声とかを、蔑視している本の中に、自分のことが記述されたり、自分の名の載せられることは、これを欲するではないか。

（詩人アルキアース弁護、一二）

と。ペルスィウスも、

一体、人々の口に上るに足るようになり度いと願はない者があるだろうか、

（一、四一―四二）

と云っているが、これが物を書く者の本音であった。ホラーチウスも、詩神（ムサエ）に感謝を捧げている詩の中で、

余は路行く人々に、ローマの詩人よ、と指ざされる

（四、三、二一―二二）

ような境涯になれたことを謝している。マールチアーリスも、

とはいえ、僕は世界中に読まれ、喧伝され、『この人だ』と〔指ざして〕云われる。少数の者が、しかも死後にしか得られないもの〔――即ち、名声〕を、僕は存命中に得た。

（五、一三、三―四）

と短詩（エピグラム）で歌っている。ペルスィウスの云っているように、

指ざされて『これがあの人だ』と云われるのは嬉しい　（一、二八）

ことに違いあるまい。文名に対しては、殆んど少年のような野望を抱いていた愛す可き紳士、小プリーニウスは、或る友人宛ての書簡（九巻、二三）の中で、斯ういうことを知らせている。即ち、彼の友人なる史家タキツスが戦車競走場で、遇然隣り合わせて座を占めていた未知の或る騎士階級の人と、種々学問上の雑談を交わした場句、その男に『貴方はイータリアの人か、それとも領土から来た方か』と尋ねられて、タキツスは『君は私を知っている筈だ、君の学問からすれば』と答えたところ、その相手は『では、貴方はタキツスですか、それともプリーニウスですか』と訊き返したという。こういう一小事件を、タキツスはプリーニウスに、後になってから語った。語ったところを見れば、タキツスも得意だったであろうが、これを聞いたプリーニウスの喜び方が大変なもので、『これ程嬉しく思ったことは嘗てない』とわざ〳〵長文の手紙を書いて友人に報じている。更に又、プリーニウスはこういうことも書き添えている。或る友を訪れ、食事に就いたところ、たまたまその友人の郷里から、始めてローマに上って来たばかりの客があった。この客が意外にも、自分の名を知っていたと云って喜び、

まったく、正直に云えば、私は私の辛苦の多大なる報いを得ました。

と云っている。ところが、ウェルギリウスは史家スエートーニウスの伝えるところに依れば、内気だった為に、

ローマへは滅多に出て来ることはなかったが、たまに出て来て、人眼につくような時には、後をつけては指ざす群衆を避けて、最寄りの家に逃げ隠れた程であった。　（ウエルギルウス伝）

そうである。人々に名を知られることばかりではなく、自分の著書が、更に児童教育上の教科書に迄使用されるということは、又一層大きな魅力となっていたようである。希臘語用には、ホメーロス、ラテン語用にはエンニウスなどが、古くから用いられていた。ホラーチウスの時代には既に、こういう野心を抱く、というか、こういうことを、少くとも喜ぶ風があったものらしく、彼の諷刺詩の中に、

君愚かにも、君の詩が下らない学校で読まれるのを望まんとするか、　（一、一〇、七四―七五）

の句が見える。同詩人は又、自作に呼びかけその将来を予言し、

お前には又、こういう運命が待っている。即ち、よぼよぼの老年になれば、街はづれで、児童に初歩を教えるのに没頭するように

なろう、

（書簡詩、一、二〇、一七―一八）

即ち、古くなれば児童の教材に使用されるようになるであろう、と。彼の作品は、存命中にも既に教科書に使用されていたらしいが、ユウェナーリスの頃には、ウェルギリウスの作品と共に、一般に用いられるようになっていたことは明かである。ユウェナーリスは、教師の貧困を歌っているところで、

フラックス〔・ホラーチウス〕はすっかり汚れ、マロー〔・ウェルギリウス〕には黒い煤がついて、

（七、二二七）

と、教科書に使われているこの二詩人の作品が、児童の早朝さげて行くカンテラの為に黒く汚れていることを暗示している。弁論術学者クィーンチリアーヌスは、これら詩人の作品を使用する際、心得べき教育上の注意を説いている。（一巻、八、五―六）スエートーニウスに依れば、アウグスツス時代の文学教師（グラムマチクス）クィーンツス・カェキリウス・エーロータなる者が、

ウェルギリウス及びその他の新しい詩人達を、講読し始めたる最初の者であると云われている、

（文学者伝、一六）

と。同史家はなお、詩人ルーカーヌス伝の中で、この詩人の

詩が講読されていたことを余は記憶している、

とも伝えている。この詩人の叙事詩『パルサーリア』が、教科書用に不適当でないことは、我々にも肯ける。が然し、クィーンチリアーヌスの注意を俟つまでもなく、

叙事詩（エレギア）、殊に恋愛を取扱ったもの……は避く可きである

（一、八、六）

ことは当然であろう。そこで、マールチアーリスの作品は、少からざる数に上る卑猥な詩は省くとしても、卑俗な表現を殊更用いているから、教科書用には不適当であったに違いない。彼の詩風を、浮薄なりと難ずる者があったらしく、これに答えて、自分は固苦しいものを書くのは嫌いだ、と弁じている詩を作り、その冒頭に、

コルネーリウスよ、しかつめらしい詩を、又学校で教師が読んでやるような詩を、僕が一向に書かないからと云って君はこぼすが

（一、三七、一―三）

と云っている。確かネローだったかは、自作の詩を学校で用いるよう強制した、と何かにあったように思うが、出典を失念した。兎に

角自分の辛苦の賜物として、名を馳せ、名を後世に伝えたいという心情は汲める。ところが更に、他人の著作に記載されることに依つて、名を拡め、名を後の世にまで伝えて貰うということも、亦強い喜悦でもあり、願望でもあったようである。マェケーナースの著作――セネカに依れば、その生活と同様、だらしのない文章であったそうであるが――は極く僅かな断片以外には今日全く伝わっていない。にも拘らず、その名が今に有名なのは、主としてウェルギリウスやホラーチウスの保護者であったからである。此の二大詩人の作品が、湮滅し尽されない限り、マェケーナースの名も共に伝って行くことであろう。こういうように、人の作品に載せられて、名を後世に伝えて貰うことを喜ぶ心持を、キケローは弁解してこう云っている。

幾多最も優れたる人々が、彼等の念願として残して行ったのは、精神を写したものではなくして、肉体を写せるものとも云う可き立像や胸像ではないか。してみれば、我々が我々の思慮とか諸徳の謂わば肖像とも解す可き詩文を、しかも最高の才に依って表現され、彫琢を加えられて、残し伝えることの方が、遥かに望ましいことだと考えてしかる可きではなかろうか。

（アルキアース弁護一二）

と。セネカは書簡の中で政治家イードメネウスなる人物が未だに人に知られているのは、エピクールスの書簡に名を載せられているが為であり、アッティクスの名も「若しキケローが自分の名と結びつけて呉れなかったとしたならば、アッティクスはあのような名門の名に挟まれていながら人の口には上らなくなってしまったかも知れない。

inter tam magna nomina taceretur, nisi sibi Cicero illum adplicuisset.」

と云い、「エピクールスが彼の友イードメネウスに約束した通りのことを私は、ルーキーリウスよ、君に約束しよう。私は後世の人々の間に愛されるであろう。人の名を私と共に永続的ならしめることが私には出来る。

quod Epicurus amico suo potuit promittere, hoc tibi promitto, Lucili, habebo apud posteros gratiam, possum mecum duratura nomina educere. XXI.」

と云っている。又、小プリーニウスは伯父の大プリーニウスの死の模様を書き送って呉れとのタキツスよりの依頼に答えている返事の冒頭に、タキツスの不朽の筆に依って、永遠に伝えて貰えることを喜び、こう言っている。

人に書き伝えて貫える程の業績を遂げる力を、或いは又、人に読まれる程のものを書く力を、神々の恩恵によって、賦与されたる人は幸福だと思います。就中、この両者を併せ恵まれたる人こそは、幸福の極です。私の伯父は、自分の著作によって、且つ又貴君の著作の中に書かれることによって、この種の数に入る者でしょう。（六、一六）

と。オウィヂウスは、流刑地先より妻に宛てた詩の中で、

私の作品が読まれる限りは、お前の名も将来私と共々、読まれて行くことであろう、（トリスチア、五、一四、五）

とか、同じく『黒海より』の中でも、

私の本の中で、お前は重要なる人物となった。お前は良妻の模範なりと称されるであろう、（三、一、四三―四四）

とも言っている。マールチアーリスの詩にも、

私の詩で、傷つけられたと云って、苦情を云う者は一人もない。のみか、私の好意の為に、私の作品の中に詠い込まれ、不朽の名を与えられ、己れの姓名が名誉を受けたと云って喜ぶ読者が多数ある。（五、一五、二―四）

と云っている部分がある。プリーニウスには此の詩人の死を弔った書簡があるが、その中で、この詩人が郷里ヒスパーニアへ引遁するに際して、プリーニウスは旅費を贈ったが、それは、この詩人が自分のことを詩中に詠み込んでくれたその好意に対する謝礼の意味であったと、はっきり云っている。

……彼が〔ローマを〕去る時、私は旅費を餞げました。これは友誼の為に贈ったのです。彼が私のことを書いてくれたその詩の為に贈ったのです。……彼は私に彼の力の及ぶ限りのものを与えてくれました。……人に与え得るもので、名誉、称讃、永遠性より大なるものが、一体あり得ましょうか、……（三、二一）

と。マルチアーリスの現存せる作品中にも、三篇の詩（五、八〇。七、八四。一〇、一九）中にプリーニウスは詠み込んで貫っているからである。その内の一篇には、プリーニウスが毎日丸一日中を、きびしい学問に没頭して、

時がたてば、将来の人々の眼には、アルピーヌムの書物〔――即ちキケローの作品〕にも比敵すると思うに至るは必定の雄弁に、（一〇、一九）

腐心している、とまでせいぜい太鼓を叩いている。立場を代えて、著作者、殊に詩人の方からは、恩顧を蒙った人の名を詩中に挿入し以て恩に報ゆることが、殆んど当然のこととなっていたようである。例えば、ホラーチウスやウェルギリウスなどが、アウグスツスやマェケーナース及びポルリオー等の人物に寄せている讃辞の如きも、要するにこの種のものに外ならない。マルチアーリスにも、これは無数にある。殊に献本の辞、献本の詩には、この要素は見のがし難い。オウィヂウスは流刑地先から、多方面に亘る旧知に韻文の書簡を寄せて、ローマへの帰還のかなうよう奔走して貰いたい旨を哀願したり、自分の難渋を明らかに誇張して訴えてみたりしているが、既に大詩人たる名声を確立した自分の詩中に、人の名を織り込んでやることは、その人の欲心を買う唯一無二の手であることを、十二分に意識していることがうかゞわれる。例えば、グラェキヌスなる者に宛てた詩中では、

まこと、もし我が詩、将来亡ぶることなくば、必ずや君屢々後世の人の口に登らん、　（黒海より、二、六、三三―三四）

と云い、又或る者に対しては、更に阿諛が露骨で、

若し貴下の名を、私の詩に挿入することを許し給わば、如何に頻繁に挿入したことであろう。貴下の恩恵を忘れることなく貴下のことばかりを歌い、私の本は一頁（ページ）と雖も、貴下のことを述べずには、出来なかったかも知れないものを、（トリスチア五、九、一―四）

と。又別の或る者に宛てては、

永年の親交で、私に最も近しかった君のことが、私の本の孰れの部分にも詠み込まれないとしたならば、君と私との両者にとって、恥ともなろう。　（黒海より、三、六、五四―五五）

と。滑稽なのは、裏切られて、敵視している者に向っては、

私の嘆きを歌った詩によって、君が世間に知られ、私の詩の為に君の名が知れ亘るのは嫌だから、君の名は挙げてやらないが、　（黒海より、四、三、三―四）

と云っていることである。プリーニウスの書簡集は、自分の手で集録して公にしたものであることは明かであるが、この書簡集にこういう一篇がある。即ち、この書簡集に自分の名を出して貰いたい希望から、これに集録されるような書簡を受けたいと申込んで来たものがあったと見えて、第九巻に、次のような冒頭で始っているのがある。

貴下の、この上もない嬉しい御書面を、拝受しました。本に載せることの出来るような書簡を、貴下に宛てて欲しいとの御希望がありましたので、殊に嬉しく思いました。

（九、一一）

と。讃詩を書いてやっても、それ相応の礼心を示さない者に対する鬱憤を吐露して、マールチアーリスには、次のような二行詩がある。

ファウスチーヌスよ、或る男は僕の本の中で褒めて貰っているくせに、何の恩も蒙らなかったかのように、知らぬ顔をしている。彼奴は僕をだました。

（五、三四）

と。此の詩人は又、詩中に名を詠い込んで貰いたがっている者を諷して、云っている。

君は僕の本の中に語られ、読まれたいと願っている。そして、これは君にとって相当な名誉と君は信じている。確かに僕にしてみても、この上もなく嬉しいことで、僕も君のことを本の中に挿入して上げたい。だが然し、つれなくも、母親のつけてくれた君の名前は、詩神（ムーサエ）の泉が恵みを垂れて呉れない時に、つけて貰った名前なのだ。メルポメネー〔叙情詩を司る詩神〕も、ポリュムニア〔聖歌を司る詩神〕でも、さてはカルリオペー〔叙事詩を司る詩神〕がポエプス〔音楽、詩歌その他芸術万般を司る、アポルローの別称〕の助力を得ても、発音することの出来ない名前なのだ。だから何か詩神（ムーサエ）の御意にかなうような名を、君とってつけ給え。

（四、三二）

即ち、詠み込んで上げたいのは山々だが、如何なる種類の詩形にも、作りこむことの出来ない名前だから、駄目だというのである。韻文には何うしても使えない個有名詞が、間々ある。例えば「スキーピオー」の如く、韻脚（ペース）に合わせることが出来ないものがある。だから、ルークレーチウスやホラーチウスなどを始め、詩人が此の国民的英雄の名前を詩中に入れなければならない時には、スキーピアダース〔スキーピオー家の者、という意味である〕なる文字を代用している。ホラーチウスは又、『諷刺詩』の中で、旅行記を書いているが、矢張りこの種の個有名詞の町を、

詩には云い表わし得ない或る町に、泊ることとなって我々は

（一、五、八七）

と、いう書き方をしている。これは、ルーキーリウスの

この日は奴隷達の祭日で、六脚詩（ツサメテル）では簡単に表わし難い名称の祭日であった。

（四、二二八―二二九）

という表現と軌を一つにしたものである。こういうように、詩に使い得ない個有名詞の概念を表現する為には、詩人は中々苦心を要した。オウィヂウスは、ツーチカーヌスなる者に宛てた詩に、『君に宛てた詩を作るのが遅れたわけは、名前が詩に合わない為だから』と弁解した後、無理をしても詠み込むには、こうするより外に方法がないと云って、その説明を韻文で書き、実に苦心惨憺して挿入している。その部分を訳出すると、

君の名を二分し、二行に分けて先きの方〔――即ち、ツーチ〕を以て一行の終りとし、次の行の初めに残りの部分〔カーヌス〕を入れるとしても〔――これは一見奇妙な方法ではあるが、分語法（ツメーリンス）と称して事実屢々行われている手法である〕恥づかしい。又若し、長い部分の綴りを短くして、ツーチカヌスと君を呼ぶのも、恥とせねばならない。そうかと云って、最初の長い綴りを短くして、ツチカーヌスとしても、君が詩にのるわけには行かぬ。でなければ、現に短い第二の綴りを間（ま）を延ばして〔――即ち、ツーチーカーヌスと〕長く延ばさなければならない。若しかくの如き誤りを犯しても、敢えて君の名を歪めれば、私は人に笑われ、嗜みがないと謗られても仕方がない。

（黒海より、四、一二、七―一八）

と、これだけの言い訳の辞の中で、遂いに詠み込んでしまっている。この詩人が、これ程の苦心を払って、今日迄実に千九百年間も、その名を残し伝えては呉れたものの、さてその御当人のツーチカーヌス君に就いては、今日一切不明なのは皮肉である。

名声の餓鬼――と云っては少々酷に失するかも知れないが――稚気寧ろ愛す可きプリーニウスを始め、その他幾多の文名は、兎に角伝わって来た。彼等の念願は達した、と称してもよかろう。博識の聞え今だに高い大プリーニウスにしてさえも、夢にも知らなかったこの島国に於て、彼等には殆んど空想に近かった支那（セーレス）人の国に東するこの島国に迄、しかもこれ又彼等の夢想だにしなかった新大陸の新興国と、ポェニー戦争とはあらゆる点で比す可くもない大戦争の後、戦禍の深刻にうちのめされているさ中に、彼等の名は又も拡められようとしている。筆者が怪しげなる力をも省ず、彼等の言葉を人に教え、『青銅よりも久しかる』可き彼等の文学を伝える際に、或いは犯しているかも知れない誤謬の罪は、彼等の亡霊（マーネス）も、筆者の此の労に免じて許してはくれないものだろうか。

（本論文は「人間」（鎌倉文庫、昭和二十一、八）より転載）